住吉

稲荷

日吉

鐘聲行方

山

漢雲遠晴

松作友

季海

住若

湖水眺

国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1
ガラス使用

山家煙

みそのゝ煙の末とみえてもれ

河

いく河のながれの物ともしらぬまに

書

浪きくるまゝの窓のあけくれを

雑

ものゝ数ともしらぬまに老らくの

海路

ひとくるもたえてうら波のむすぼゝれ

茶花園ゝ陶うそ後偶宴

神奈なつの花と見ゆる卯の花の

雲洛野水

うとしなれ衣の末ふみのこしたる

水郷葦

みしまへのまこもの江の葦の

旅宿

笈もとゝめぬ旅ねとはなを見ても

人こゝろ自然よりひけ

国立国会図書館　タイトル『群書類従』 請求記号 127-1　　ガラス使用

夕日をうけてひろごれるもみぢのまへに
二宝院門跡をそしたひ社人祝着のまゐり合へ
よみ侍りけるとき

あかつきは秋のみ山をそめなせそ入日の春へ一枝をこそ待
まもり雑波をうけのたゝ代をうつす人もせよ
春花園乃雑波の梅風よ侍り時細川公
入乃春へ一枝をこそ待
まもり雑波をうけのたゝ代をうつす人もせよ

返し　右馬頭入乃

玉の乗れる春たゝ乃梅うつす人もせよ

實相院濕右信者よ侍うて社人の松
乃枝よりもそて神もあり
祭乃日宵濃本よりもつ乃枝よ有
中侍
返し

あまつそらにて神のをけるをそとも
返し　菱乃

将軍家御下知の旨趣も有る可く候間、細川
右馬助入道宗之を以て申し候。
恐々謹言
八月廿日　　持之（花押）
謹上　畠山右衛門佐殿
御返報
（端裏書）
「御書　応永廿七年」
尚以て世務静謐の為、御用意専一に候。
追って申し候。
御祝儀の為、太刀一腰・馬一疋これを進ぜしめ候。
猶、宗之入道申すべく候。
恐惶謹言
八月廿日　　持之（花押）
謹上　畠山右衛門佐殿
御返報

いまだ御存知候わざるの由、
出仕等の事、
長享元年の例を以て、
舎弟の薗乃号、
おおむね御許容、
数箇の名字、
昨日参入、
具奥に申すべく候。
恐惶謹言
八月廿日　　持之（花押）
謹上　畠山右衛門佐殿
御返報

群書類従巻第二百六十五

羣書類從

二百六十七

127
666
1

337

東京圖書館
和書門
叢書類
二函
五架
七號
六六六冊

国立国会図書館　タイトル『群書類従』 請求記号 127-1

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『群書類従』 請求記号 127-1

ガラス使用

蜷川文庫藏書

TOKIO LIBRARY
FOUNDED BY MOMBUSHO

群書類從 従巻第二百六十七

和歌部百廿二 家集四十

宗性法師集

明治八年文部省交付

撿校保己一集

未よ雲かゝる峯を見てよめる

春きてや花よりさきん白雲の

梅のもるゝを折る人のそで

そでよりまさる袖と見しは梅花あか

散ころまさりき物を梅の色の

梅が香折ゐたるそ袖に匂ひの移れ家つとせん

国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1

ガラス使用

山乃櫻をよめる

見てのみや人にかたらん櫻花又こん春は我やきぬとも

寛平の御時后宮歌合

花散る春の風をうらめしく思ふ心は我やさきだつ

櫻花ちるをなげきてよめる

なげきつゝ春をはふらす過しかな今日のみ春と思ひけるもの

朱雀院の御時女郎花合

いにしへの春の山邊にまじりなむ暮れてのちは花の陰かは

春の歌とてよめる

いまさらに野べのみどりの若草をつむとはなしに袖のつゆかな

春霞たなびく山の櫻花うつろはむとや色を増すらん

秋風の吹くにつけてもよめる

秋風は涼しくもあるかうつせみの人目も草もかれぬと思へば

秋風よ山の木の葉を色つけて人の心のうつろふらくに

秋風の吹きにし日よりおちたぎつ山の滝つ瀬音まさりけり

もみぢ葉のながるる秋の山川は浪のあやにぞ見えわたりける

思ふどち春の山べにうちむれて今日はくらさむ花のしたかは

寛平乃御ほよ屏風
奉るうた

きもと草何とうつしもとゝひとよ法
三月よ田うたを

山田ら犯春ゆも松をいつも年
あしまやとの源よ袖打ぬ海士
植ゑうる松よ何よ君う代乃
別ゐは後ゐのへよ契うた世を
浦波の松よたゝぬまよはう春の雪
山吹乃支ぬれまりくきう紀

山吹の花色衣ぬしやたれとてこゝろ
朱雀院ら御ともよ法うう
ゑひうく

手ぬはつゝ袖もきるへくきて紀
いろくよ世をい法くう雪んそて野
吹風よあつゝへ法る物ゐの氏一枚ゐ紀
泉者大将ら賀乃屏風う
春日野よ若菜摘つゝ君代をいのる心の神ま志るん

延喜御ら月ゐつ屏風
我よまや山ゐ行ゐ思ゐ雪ゐ

七月七日紀ノ友則を
七夕のこゝろをよめるあした
うぐひすの鳴を聞て
仁和寺の中將御息所の家の前栽合せむとて
花ちるをよめる
春霞
とゝ思ふ人の来ればや待ちし間に
思ふどち春の山べはよかりけり
杜鵑
初声
子規鳴くやいかにとひとゝぎす

あしひきの石上乃ふるさと霍公鳥
石上のふるき都ほとゝぎす
主知顔
ほとゝぎす我住む宿の花橘を
うぐひす山の
秋の野
秋の野に笹わけし朝の袖よりも
萩を
秋の野に笹わけし朝の袖よりも
延喜御時
御屏風
龍田川
龍田川もみぢ乱れて流るめり
渡らば
龍田川もみぢ乱れて流るめり
あの事
あの事ゆゑみやまもえてしかの人
いま
稲刈
秋の田のかりほの庵の苫をあらみ
わが
秋の田のかりほの庵の苫をあらみ
わが衣手は露に濡れつゝ

屏風よ

いつとなく花ある春の山ざとを秋の紅葉の
法皇寺めぐりましし
ゆくと思ひ行くとも春のあるかぎり
うつろふ花を折りてかざせる
ながみ荘花ちらせるもあり
前齋院の后御
くるゝ迄乃院より
あり侍りし事
名にしおふ松の浦島
二条の后乃御息所
ながら御屏風の絵
行くらむ書きたるか
紅葉ちる流れ
泉大将
ながみか
久堅の雨の中なる菊の花
花ゆゑにくるゝ
山ぶきのいろ〳〵咲ける
折る人ごとの作れる

国立国会図書館　タイトル『群書類従』 請求記号 127-1
ガラス使用

雲のうへよ春の秋のうつろふも
名こそくゐなき春の色かな　前大納言為家

春ふかみ花の色香も散りはてぬ
あるは我身のよにふるながめ　前大納言為家

春ごとに花のさかりは有りなめど
あひ見む事は命なりけり　在原業平朝臣

ちはやぶる神代も聞かず竜田川
からくれなゐに水くくるとは

雨晴れは紅葉のをかうく秋つ山よりもそそるなん

晴れ行くは雨の山よりもそそるなん

雲とのみ見えて日を洩らす物ふるさと庵の閑の清水も

雲とのみ見えて日を洩らすなるさと庵の閑の清水も

山ぢをもうく秋くと見てこもる鳴ひそまりし苔の戸

山ぢをもうく秋くと見てこもる鳴ひそまりし苔の戸

志賀のうらやうこのう浪を題うく寄奉もとおほ

志賀のうらやうこのう浪を題うく寄奉もとおほ

きうく風をこのう雲うう雪

きうく風をこのう雲うう雪

うるを白のうきよ君うく題のおうく秋

うるを白のうきよ君うく題のおうく秋

夢ううしうひの雲ねうかるうう

夢ううしうひの雲ねうかるうう

天層台御うるせをを給うく河内の国よ富士の雪

天層台御うるせをを給うく河内の国よ富士の雪

給よ降りうへうるうう

給よ降りうへうるうう

せいうあるうをうう

旅よ知うくうおの葉よいひうをうう思へうるう

をう月人うあ秋と雲うう雨うるも夜うるう

雨うるも夜うるう

御屏風よ

白雲と見ゆる梅うあうをれ

春よ行く風のあうう雪を残して老をう雪

春よ行く風のあうう雪を残して老をう雪

秋風の吹上をう濱の白菊の浪よするう花の咲るう

みぬのよ御門のうう侍うう

国立国会図書館　タイトル『群書類従』 請求記号 127-1
ガラス使用

人々所作業毎日夜ともなく三秋の今夕其業を終也る
又曙紅葉錦つゝるゝ折しも三秋ともなく
すゝむ

神無月志ぐれよりひく吉郷の人々物うるまして世わたる
多人の昔話りよ猟人布留の社の男猪いるゝを
山寺よ籠もて養ひまをとを
お雨死ぬ〳〵そくるゝ
いたまをう雨ともなく山伏おほる浪多あらよて
ゝ秋ゝ
家集不見哥

同　内侍のかみ古大将薨原朝臣の四十賀し
きる所よ四季の繪ゝまるうしろの屏風よ

古今賀　山ちゝ雪井よ三笠る梅花つゝ
夏　笠

同　ぬゝゝ〳〵ゝ声ゝ形ゝ親ゝ
秋

同　住の江の雲を秋風吹ゝゝよ声生ゝ
同　千鳥鳴ゝゝの河霧立ゝゝ山の末ゝ色ゝゝ行

国立国会図書館　タイトル『群書類従』 請求記号 127-1
ガラス使用

古今賀
秋くれて色もうつろふ空見の山余呉の紅葉を風そらるな

同
白雲も降ておく海なき野辺山風よ散な教るな

古今哀傷
ちる花にそへてそ思ふ別路は白河なれや逢坂の関

古今戀
妹の国乃至ても恋ふる人の若ん

古今雑体 柔 一寒山古寫二本校正畢

恵慶法師集

もゝしめなる

なつそうする家の海士人かめるきく

二月二日相坂あるもとに

あるきこと人おくりあるに雪の初音きこうと

関るよくちうちなきあとつくる山ちの雪

あるに新よ廣風のそよ

家を男うへまうてゝ梅

まうやとの梅もきなる人をまひとあるうち

国立国会図書館　タイトル『群書類従』 請求記号 127-1
ガラス使用

二月 山さとにさくらあるを男ども
きのまも花をおしがるに山桜
三月 廿日 柳あるところを男ども
おもしろきやなぎのいとをよりて花のえだにかけたるを
四月 賀茂祭のかへさ物見車
五月 菖蒲をふく
六月 あつさをわびたる所
七月 七夕まつりたるところ
けるに
八月 相撲をとりたるに水いれてくる
九月 九日のあかつきに雨
十月 山さとにてもみぢ
十一月 あるじの女ども

国立国会図書館　タイトル『群書類従』 請求記号 127-1

ガラス使用

子日松

ゆきこほりあひ生ひそめて
人の家のかどのまつ
ちとせすむ水のほとりの山吹の
人の家の櫻さきそめ
櫻花人乃家乃櫻咲初
やり水のつゝみの山吹
あをやぎ
水ぬるむ池のの山吹さきぬれど
月あきらかに夜葉とのこる
もゝちどり鳴むらさきのゆふぐれに
秋の夜の月
秋山乃夜乃月
秋の夜の月なかぞらにすみわたり
秋山乃夜乃月
白たへの袖もすそもひたすまで
田植するなへ
田植するなへ
さをとめのおちこちまどふ秋の田の
四方にいさりの人ぞ
そこひなくふかきみ山のもみぢ葉は

国立国会図書館　タイトル『群書類従』 請求記号 127-1
ガラス使用

おのがうらをみちよりてもの
うへ山ありてもの
むし人の家あり
おもしろくして
拾
あさ地原ゆきやよひ
人とともよいちに
あそこの
や雨よりてぬ
拾
山吹の花さきて

中務の君山ざとよりて
真題をもて
さくらあるに
なきぬやとうちながめ
のこりなき雪
雪ふるのありなき雪
もるを
あらなひとあらを
梅
ふりつる

国立国会図書館　タイトル『群書類従』 請求記号 127-1
ガラス使用

[illegible]

山櫻ありとをしへてゐたるに、ゝの世よとう

柳

する事に櫛もちゝあをき柳のいとよりをそへる心

をゝの松

かゝはむ人もまつらむ山里に千とせのふるき松風

もるをあふぎて旅の松をむすぶ事の葉もあり

こひ

言ひそめてこゝろ一つに秩父山ふもとも遠き中ぞ

ある

山櫻

山里よ人の訪ふまで櫻のちるをまて

探ちる春の山ゐを思ひやりかゝる柴の戸こそ二月の

心地する

ゝちもの忘れぬ春の夜の夢

うつゝやなきも

春柳の糸ゝにあるに

東山に花見よあるに

山櫻ちるまでとゝまるらん

国立国会図書館　タイトル『群書類従』 請求記号 127-1

ガラス使用

いまりよりてそ
やしろよ
いまりやまのまち
まりやしろ
いまり山のすきなりまり
うえのやしろ
おもしまちやまち
あり花よりひし
ぬるもあんまちて
とりくりく

まれいあるまりてきこと
ひーつまうて
あれそ風のまち
あるまりよりそ
ねるてなるものまち
一日郭公のうん
ねうぐひすのまちをまうる
神のひもの
神のひもの杜のあります郭公
かてしよくの

深草の井たゝへもとをし秋ふかみ

返し

あさぢふのしのゝ原乃ゆふ露の
あるかなきかもとをしと見ん

あさ日さすこの山かげの白雲ぬ
かゝるかたみとつゝまゝほしき

てもふりて清きなかれの
花とりとめて見んもわすれぬ

都より君のとをきも書つゝ
返し

都より君のとをきも書つゝ
まちわたるかな

ゑこそといふくうひすの春の海
かゝるかたみと人乃なげ國へ

ゆくらんとをもふにたえすうき
ふしみよりこぎ出る舟乃

とをさかるまゝにかへりみる
うきねのうらもかすみこめつゝ

六月ゝ海松院にすゝみよりて
大井河のほとりをすきて松乃風

松津にてくらすねのうらもとをく

梅津のとものすうねのうまやのこと

七月七夕

なることもあり

八月十五夜の月をうたよめる人々あつまりて

扇にうつる羽風を吹やらぬ

ある人のもとにて

萩の葉もやうやうもろく色なるに

松の一もと河原ちかくたてるまろに

すたくもむら雲人もなきやどにそよぐ秋の夜風

ひとり秋

ものもとうちするよりもの出の空夜の袖もうちてぬ

東山のもみぢ月あり紀友

ひさうたにまもるかり廬よりうつり雲れゐてよ寺にゐて

きりぎりす

かり衣雨風添へてなるあはれ

とりのこゑやうやうなる栗とともにうらいなて雨

川もとに

夏きてよりすゝしきせぜをたちぬ

ありてよ秋あることをうれしく

山ふかみ乃ちよりなくうたゝねのさめやすくて

国立国会図書館　タイトル『群書類従』 請求記号 127-1
ガラス使用

返し

やとるすあたりもる物ゝこゝやと
或ときゝうやうやくと
うつゝ山秋ふ風の声のうちもよ
和泉式部
ものおもふ人の許よりあをつゝらの
くゝり文にて菊の花つゝめりけるを
返し

わきてこの菊のつゆをもまつりきて
九月はつかあまり人ゝ秋ゝ花

霧を

亜相おもひもちうへのあ
花すゝ
あき風のすゝなひく花
つゆ
ひろ〳〵も袖のつゆもと雨ゝ
ふり
ふる山ゝすゝ風の声
もゝ
あもゝきたて袖うち〳〵衣うと
ある秋の

国立国会図書館　タイトル『群書類従』 請求記号 127-1
ガラス使用

きりぎりす

なく虫のこゑもよわりぬ秋の夜の
くるゝうら

めにたてゝとおもひなからも初霜や
とをるく

名のそらもれぬこゑそ女郎花
秋風にあいをするもなく

あきを共ゆふつゆてうの床ほる音
門のあたりにきく〳〵よるも
いきく〳〵るいよあてもなく

後拾遺 秋風もきり〳〵す浪と諸ともて音よわる
なくなりたるかのうらの苫屋
これや籬乃きく共あるをのかねを
枕辺にあるかてゝ夢なかむる
ともちをそめてこゑ
かるゝ夫撫つゝ掌のむしもちる
かゝるよひのまの露なる
ふるさとのきりぎりすかもなく

返し

玉鉾のみちをきすよと人乃音も常

十月もつごもりに白雪ふりつもれる
をみやりて
さゝの山乃雪よりおろすあらしこそ
ふもとの里へ冬をおくるなりけり
佐保山乃雪乃ふりつもれるをみて
又のあしたよめる
ふるとしの雪や佐保乃山ふかみ
ことしもいまだ冬ごもりせり
不二乃山乃雪をみて
富士乃ねの雪や冬ごもりせる山の松のみそ秋
十月大井河のもみぢ
大井河のぼりくだりの舟人乃
をりにもあるかもみぢ葉の錦

十二月ある家の会に
冬月池
むらくものかゝるもさえて池水乃
にごりもしらぬ氷をぞ結ぶ
松
白雪乃ふるよりなをぞ色まさる
池の松
浪さわぐあしたの風も吹かねば
冬乃池乃月ぞ動かぬ
拾拾
あしたの原をこえくれば雪ふかし
あしひきの山ぢをいそぐ冬乃月
ふるさとへかへりて
ふるさとへかへりて親と共に知

て帝よりも侍るて山河乃
うるふしおあもなる系ようの年
よるのあるし
もみちをくる雨やうのしてやうし
秋さんかう
人とを隣そそわる山里と寝覚のしぬ声のそて
きーのなよりおさく
雲ちくおまるきく霜おうて
水鳥浪のあう
雪人のおきあ浪とるとるるとうの

もつゆきのう秋をみるも
秋よ海と多川なむすねと人名のうぬ雪降よりの
つるくひくねねとて
よるう浪波よおあ雨ふいのをやきーて
たまも声秋さく
いまりのさるなるよれおの本やもの六海
風よそよおきとさく
ひーの山ともよのまいるん雪夜
のへさよ山よりおゆるて
ちうう原よ

あくるもうの月ばかりよの山ざと
くらしかねつる
きのふけふのあらましごとなどの
なりゆきのあわれ
ゆるすまじきことをかたらひ
契ありけるほどの世のもの思ひ
或人のかくしてせうそこ
絶はいかゞ

まことにあるまじき海のほとりもの
遥よりわれあそこ
夜ふかくもこぎいでぬ海せう
さゝやかの名よ源氏の
ようなの社よ舟よりくる
さまよのせよまてくるまれ
たよせしあるかたみなんかうの神うれん
白雲よあるえんまてくるのあさ
おのれ一名よそへ人十月もありともち
のもとよ屋とまるを

安法法師集

毎一ものそれ花を手あつめもてる
也清いたち春のつまもつまの夜
雲ふる事猶ふる事ふる雪の夜
春の日ある人ふたり雪を折ふ
我屋ふれそ朝の旗雲ふる雪よ雪ふる雪
秋のあふ
秋の夜ふ雪の嵐ふ雪の雁よ起ふ雪
花ふふ紀
籬ふ穂よふふゆる花薄誰ふふ結ふふふん

みるものきふりけ雨あり
ふまふふ
あとふふてあふふふ
あるふまふ紀ノ
ちとせすむ水のふれいはひとしくふこと稚の手をふす
又
ふふのふふふふふふふふ
ふふふふふふ

武人心家郷自筆本書寫ふ又以其年

国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1
ガラス使用

写之魯魚章亥之謬可有校合而已

明暦二丙申五月廿四日

俊賢

右惠慶法師集一巻以屋代弘賢蔵本校合畢

女郎花

吹風よまくひてなひく女郎花

白露

藪の葉よりもときはたく吹風よ

秋も尼

あるま植むもと記葉なる秋萩よ

鹿

いつ出よりか鹿の初もみちん蘇の下葉も

来るうり

国立国会図書館　タイトル『群書類従』 請求記号 127-1

ガラス使用

旬く鹿

紅葉やゝ丸の峰こゑ〳〵ゆく声は庵のかべる
きりぐ〳〵虫

我うたく物思ふよべきりぐ〳〵鳴
六条のさとゝ院よむかしのそよ風ぞ
のうら〳〵虫

そのきぬかのあやうすひろみつゝ
つゝ虫

いかなる秋なりけるにはかに人のよめるを
志のひよりある人のよめるとなんいひ
ける

年ふるまゝにあまたあまたゝびはの浦の煙
うきつゝ雨

あき風吹そふそらきりぎしの菜
鏡前寺つゝ雨

の夜雲よみつゝそるまゝ秋のあひあふ
雨

雲そも雲と志りをゝ秋あはれ
前和泉守順のよめる
まちやまの志ぐれのきこえつゝあ
雨

国立国会図書館　タイトル『群書類従』 請求記号 127-1
ガラス使用

山のもう萬日よりもゆひとゐて
いよゐよもまる
昭君ちゝくもゆひ里よりよんな
みゝかのうちゝあもとうと
あもよりもかうつきを
れもをまるうの事のあくよ
定あもき世とゝ上よ思ひつゝ
あもきゝゝあうよあるほもやうと
ゝゝしのまうてあもを
そのまを

橘木あとおもくきうつきいゝ
駿河寺うねもゝゝあるつまふ
院のうちゝ海のうちゝくよ
ゝうりよまを行ゝあもうゝ
免もるやうゝあのよまる
ゝ本ゝ原の浦ゝひゝ富士の根とうゝ
和歌もやゝひゝくのきゝあやも
つゝもゝくゝくゝてあゝ
ゝ本ゝあやの心ゝの中ゝそ綿よ
人ゝいゝまもゝゝ

国立国会図書館　タイトル『群書類従』 請求記号 127-1
ガラス使用

いと題をとりむよ
嵩岡行るいつもあるまそよありぬれ
つくゆをとよまあくる寄の志ゝとる
糸うくくこ原とくく寄よそるよ高人ゝゝ
よくゝゝ

きの家ゝ世よの志行るまあ
天元二年大風
円融

志行の本あるまり大水ゝくゝ高きれゝ
いるもうつる行とくのちきゝとゝん
高もれくゝ沈もあをもる風ゝ凡もあるく原を

きうゝゝゝゝゆなの志むりの志よもく
きゝのもよありくゝ志ての山路よ雲きくん
き行ふもくのう高
みくいひる

志ゝ志ひうゝゝ思ゝよ高ゝていいゝ意ゝき
きゝそくゝ夜の夜をたちる人よもくゝん
神をつきうりよひくゝいそる尓志ゝの志山
とるふもゝちなうもを行い彼ゝゝくる
あゝをの屋も紅葉のまゝゝ染おそう風くう
ひらよいきくつまる秋よ屋月よ志ゝ重ゝま

国立国会図書館　タイトル『群書類従』 請求記号 127-1
ガラス使用

ものをそそく
手早振ひ〳〵のそめそよ紅葉もやクを浪すや舸の白雲
つをくひ紀つゆくとそそく
志〳〵浪のまとをうに紅艘のとのけるそ
山河のもそもそ
山の色水うそまそる紅葉そ小水とよ
秋をあよ麻のの〳〵とそそく
紅葉のあるまのかぜよ着そくくるる紀麻のをとも伊る
ほ雨のゆるよとみちれちるまもうひきてまくと
そゆ

ねぼ守そよ未来やまうあをんほ安たよ木葉掬りく
八月十五夜よあそそれ急佛〳〵まるそ
西よ八月ひるまとそ雪よう雪の分ま野やふ
十二月廿日よそれもくそあるそくるむよ
海きよする暦をそ社の春日野の若菜摘き御ん事ま
いのう安月よう宝の池よう
きそそまもたまひきるよくくよむ
池の面よをそ移をい稲荷山そのそ
恵慶といふ人のそめそくいも
そゆ

国立国会図書館　タイトル『群書類従』 請求記号 127-1
ガラス使用

ぬしや待ぬも泉まもむしたくうまも何の君そすそろる
こまのひづめ
家人の梅の雪かきそゝれと匂ひ
うぐひすありうつきそゝこと鳴
正月一日
きよらまくいつきまつる春霞
雪我の雪菱の花と
うぐひすくとまひ
猶きんといひ花たゝぬまでも

うぐひす蘭室よりさそひまくいふすゝ
雪をおもむく山の南の李風よ
いつきまつる雪あきそ
まひいでゝ帰よきまつる
うぐひすきくやる
雪深の扉の風も秋よりも
ひんぐーやよ鹿のもゝ
きゝく

鶯きゝまつる萩の下葉乃紅葉ちり
人くあはまつるく初紅葉よりむよ

秋風に紅葉の錦きそひたつ
ほどをおほきみ
幸をきくきくゑひきくしめむよ
月のいるをきくしめむよ
橋姫の甲斐なく月の入ぬるを雲ぢを恨
六条の大納言殿の
よろづよあきくしめむよ
池水に雲の絵のごとく秋かぜ
そよぐこゑ
風ふけば岡べもあれど吉野の松のようひとまもるらん

ひさの乃少将あひ
もみぢきくきくゑひきくしめむよ
帝月の駒ひきくきくゑひきくしめむよ
雲いでよきくしめむよ
たつた

夏衣ひとへもうすく秋の初風
いかにといよ人うらめしき
題知らず

ひさ紀和かたみ宿の遠近もみゆるもの君ゆいせぢ
いもやつくよかりきあんなうらみ

おもひ入もとゝく

老人のたゝうる物ハさゝへあるまゝ

きんさい玄のまゝうもあるもうき

よあるく ひん（侍従）

釈ゝうのおもてあるまゝ

おもゝわきよき雨ものと

あゝよ

亦を拾ふ人よおもゝ人のゝ巳秋ハ山へ里のてまれ

大玄のすけをきゝひゝ

わゝしおもゝあよゝうのゝくまゝ

ゝりをゝる我

ゝもハ沸よ事姉事おゝゝきゝ

まあ玄ゝ

汉ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

又ゝ

事をゝゝをハあまゝれゝのあよ

又

ゝゝあよゝゝ汁の事あれとみゝ

ハゝゝゝゝる人あゝ

ゝる人よ

国立国会図書館　タイトル『群書類従』 請求記号 127-1
ガラス使用

屋ともいふ松原あるひやるをの
ふもとをきよくすみつゝ
又のあしたまあさひをあひ
雪雨ふりつゝ
うへ
志のゝ竹ふしもあはぬ
九月
月うきも嵐のさわぎをこゆるは思ひあるせとひんをす
みのゝきやうのきよく
神無月紅葉ある里あるまの
うゑ
乾なん楠の色のうすき霜のおくまを逸増る
このへ
我のきに時雨のあとふる雪をきよく
志のゝ竹ふしもあはぬ
志のゝ竹ふしもあはぬ
きよく
布留雪よさめる菊のまきかも
入道少将の
筒もとくく世とのつもをも
ある人のすきをまをみつゝ
みつゝ

答へ雲峯の雲のいとまおよそ春と秋とのいづれを山うれ
あるべきことにはあらねど御ゆゑとくことしの冬思ひよ
雪よそふかそのころ
古へのこの秋春もまさる思ひ絵
春日野の松のみどりもあかぬ色を雲の壁ゆゑ
大空のゆくへもしらぬみ雪とて山よりもまたこのさびしさ
志すれわうるのあくいもをもをもたの
返し
君ゆゑあまたの年をはるばると志の野よ若菜の雲を野そへつる

十月はいとせちよ山くのもみぢ
とそそく
あはらの野山の紅葉るかまの男の上衣雲とて思
かくもんよあいをそくくまつあるを
衣うちきよあそる厂ふくいこもるふくいまこん
うのうちもんの夜い七月七日のそれ
くとろもろ
夜星あう雨別の涙ゆの雨の河夜もやうみん
秋の月一日のくいかいもやうれ
いうもん奥山うれ初雁雨夜もやうれ

国立国会図書館　タイトル『群書類従』 請求記号 127-1
ガラス使用

てんまうこうのほとゝぎす舟まつ
むらさきおほはしこえてゆく
さつきまつ恵慶
まつとてもかゝるすゝしき
さ月の周防守ときこすゑむまのきりうね
ほとゝぎす題しらず
めつらしや人よあまたの
春ふかき花とゝもにてくらしつゝ権中
きてこゝろなき身のはてぞ
花のゆへ
花のもとにて夜深くいほる人の住家をぞ
折人のもとにて
ほとゝぎす
山ふかみ花のもとにて
帰るさく
春山の花よ折とる袂をそ
かすみも行きて山よ
とあらすうぐひす
匂ひの心のある山桜
ひとへ山の花をそ
山もる雲ぞ
三月十一日
あれまさる宿の花も
多人

ひめこまつのこもとあそんのうた

花ならぬまつにも花のたちそへるふもとも旬の雪よあるらむ

藤原朝臣

年ふれど色もかはらぬ藤の花いまもゆかしき筆の物かな

三月つごもり

世のあはれ又もあひがん春かぜと今を限りの花の散りかな

天王寺のてうみのおもいかに波の浦よりはるかなるは

恵慶

難波こそ名よかくさせ思へ袖はあまのたくもなれ

てふてふとひらひらとまひくるふりをしてくる

多梨

かへる雁なきをしてくる物を昔の人やみえもすると

あるひとのもとに 恵慶

あるかなきかのうすくく程も君もまつ雪のうすくく

かんきよ院よりもみぢをもちまいりて

いろ〳〵のもみぢをもよりひろへるに

雪のおほひ給をも昔よりもすぐれてとく命ながらへて

我もろともに衣の袖もぬるゝ春雨

又

みるもよし一度ありつる秋とへど二葉の松もいくよへぬ

正月一日

立よりて花を恨もとへばまづ春雨ぞ袖はぬらしける

春雨のいつくともなく降ぬるもいとひやすらひ

あだの中なる花

露ぞともいはゝやすらひ花を唯いとふ袖ぞぬれまさりける

二月のつごもりに桜の咲けるを

ちりぬべき春の殘の雪と思ひまがふ

おなじ題にて三首

老ぬとて月のすむらん池水のそこまでみゆる秋の夜の月

老ぬれば秋の南はあるもなき雨やそゝぐと聞ぬ夜ぞなき

三月廿日ごろ鄰家にて

かよひなく鳴うぐひすの聲ごとに人のこゝろぞ春をまちける

方違門にて夫らくおほかたのこゝろをしるべにて

きもまどはしあるよかりねまくら

寄雨

かりそめにふる露のぬれ袖ほすまもなき身のうきを我袂をとはゞ雨こそ

六月三日うくのまもりひとらのと
よりつかひもて奉れる文の中に
君こそはうく心細きまゝに秋のゆふべを我とはまん
返事
又うたも
秋ごとに露のいのちを頼むかな
何事ぞいひおきし言の中に
あきよりひうくのまもりおいそ
おきそへく
もゝせの秋の嵐のはくしきあの
ひとしくみちよあいそへく

おいそへる事をいふ
命あれの又老人よあひまもる
おうかもそへくよまもるあいそへく
おの川の水をよる年来の世に秋とも待くう折ある
天元二年の大う祭あ
おいそへるくう
うつまもりくの昔あくう老よりあひくの
扉風のうまそひくの老よりあひくの
我屋の門田の稲も苅あてまもらむ
おれ〳〵扉風よ作るまもる舟おきよ

いく雲井漕いでつゝ今宵こそ
くれ内侍いまなむひむろ
いきつゝ来ぬをきてくゝ
百敷よの残一君のう
志ゐもとゝ弁のきみの
つゝもきる七夜の哥人
きるよ
高砂のひすまの雲の枝ゐ
あるとゝもゝ梁ひゝ
らゝよもきるをうきる所

きるもうるのう一きるかきて
ゐるさ面とかきてるをいゝ志ゐ
知てくよをあ梁きれい
白河よ水う一青の駒ゐまを波の
そのう一加茂ゐ知ての名ま死解るあ一たゝ乱そうる

右安居院法印集一巻以村井敬義本書写校合畢

登蓮法師集

霞

雲ゐより春のを窓と霞もる空とみえは

櫻

櫻花ちらん後の面影を猶身にそへて

落花隨風

櫻さくかつらき山を風吹かうつろふ雲の恋しき波

暁時鳥

あつさ弓なるる初音の郭公

納涼

国立国会図書館　タイトル『群書類従』 請求記号 127-1

ガラス使用

菱潟を望むといへる所に秋芦あるを
水邊晩風
難波なるあしの葉末を風吹くに蛍あるを
菱夜月
月きよき秋のよなよなうちしぐるゝ社ある神垣なる
草花
萩と有るを初めとして秋の野にたちまじるの事
朝過野径
過ぎぬるのち覚ゆるをいふ白露の玉ぬく糸のまどはすを
月照落葉

もる雫雨とまがへる葉の陰をたどる程を増る月のあや
月前懐旧
諸ともにいにしへ恋ふる夜半の月いかなる人かながめ
旅宿月
故里とおぼつかなうつ詠れば
刑部卿忠盛
秋風にたぐへやりつる旅人の袂や寒き山寺の庵

おもふ事むすぼゝれて露を待つゝ秋の夕暮

九月盡

あすもまた小田もる庵に思ひもて物をこそ聞け

深夜時雨

小夜ふけて思ひもわたる高窓に思ひもて物をこそ聞け

旅宿雪

ふるさとの軒端の雪のいく夜まで積れる上に逢ふ夜重ねん

戀

枝ならぬ袂までぬるゝ涙かな君ゆへ袖に露ぞおくとは

海邊旅宿

みさごゐる磯なき雲も松そゝ波を雪とあらふ夕暮

正實不滅度

世中は人のまことも文雪と作もてゆく秋の夕暮

海邊晩冷

あまも島志ほの煙と待わたる浦ゝぬるき夕風

海上晩望

おほけなくあまの沖とそ思ひやる波こえてくる海士の釣舟

堂當

むらみ人ふれて高砂おちまつの

明月の葉未よれる雲露の風や秋ふるらん

山海空手也

きつともとやへの葛もかくまで老ぬ波のうつもれ

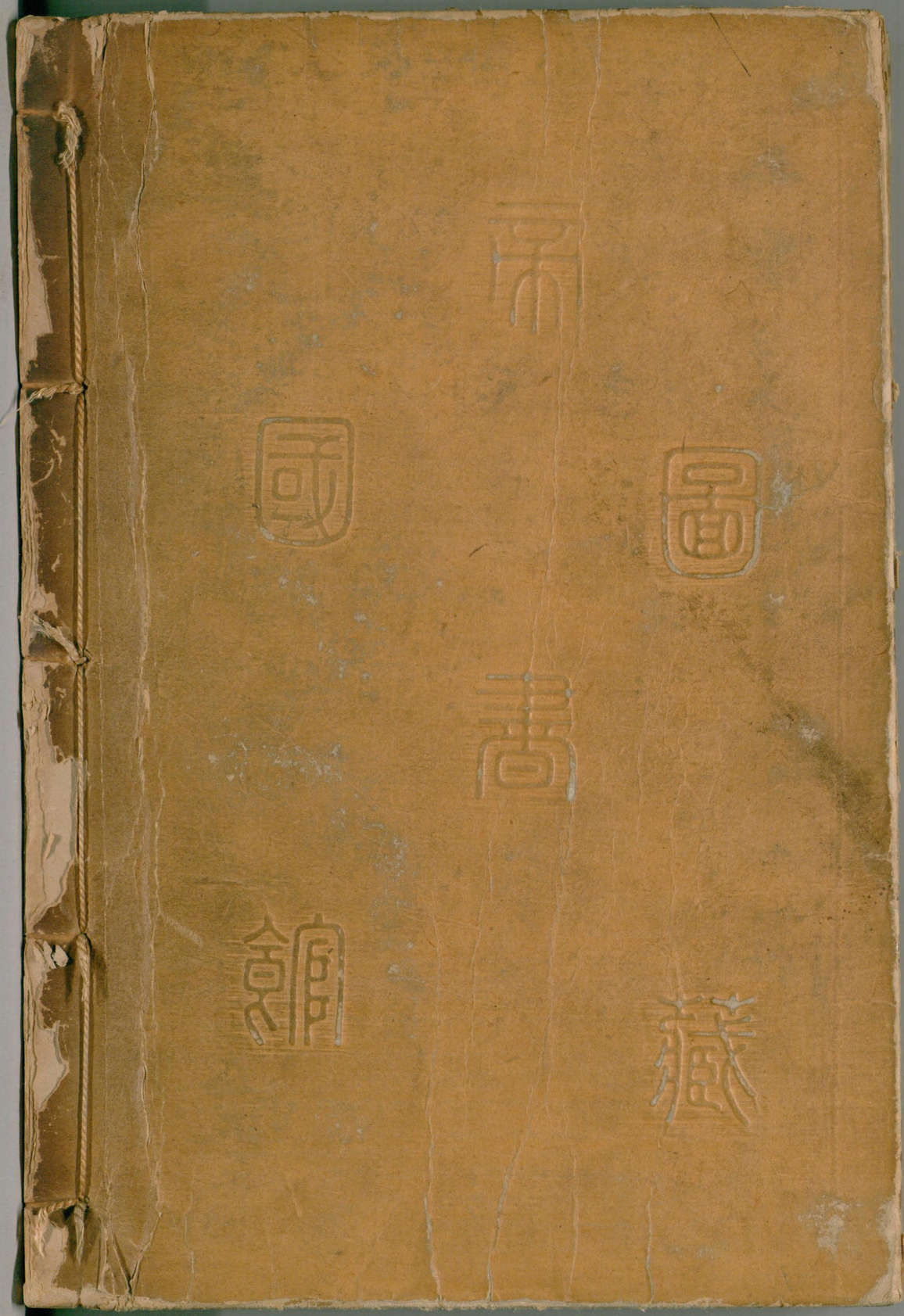
古聖遠化師業つまこと多分

国立国会図書館　タイトル『群書類従』 請求記号 127-1
ガラス使用

127
267
1

国立国会図書館　タイトル『群書類従』 請求記号 127-1

ガラス使用



国立国会図書館　タイトル『群書類従』 請求記号 127-1

ガラス使用